

旧徳山村宮川家住宅について

小寺 武久*

On the Miyagawa's Old House in the Old Village of Tokuyama

Takehisa KODERA

旧宮川家は岐阜県揖斐郡徳山村大字戸入字村内、揖斐川左岸に建っていたが、徳山ダムの建設に伴ってこの地が水没することになり、岐阜県百年公園の敷地内に県博物館の屋外施設の一つとして移築し保存することとなったものである。

移築にあたっては、国や県による指定文化財建造物の修理方針や方法に準拠して、事前および解体時に調査を行い、それに基づいて近年における改造部分を撤去し、建造当初の形態に復原することを基本方針とした。また旧材料は丁寧に解体し、補修等を施しながら可能なかぎり再利用した。ただし旧地におけるこの建物は、他の大多数の民家と同様、棟の方向を川と平行にとり、南面する平入りの建物であったが、復原・移築するにあたり、敷地の都合上、やむなく西面させている。戸入でも、川の流れの向きの変化に従って棟の方位も変り、それに従って西面する家もあり、また、僅かながら、棟を川と直角方向にとって妻入りとしている例もあった。一方、徳山村でも東谷の櫛原などでは、棟は同様に川と平行にとるが、入口は妻入りとなる家が多い。

規模は、桁行7間半、梁間5間、外観は極めて端正である。外壁は化粧貫を見せた堅板壁、屋根は入母屋形式の茅葺で、雪の深い山村の民家の典型的形態を示しているが、とくに土壁をまったく用いていないのは、徳山村の民家の特色といえる。一方、二階を設けているため建ちは比較的高く、また屋根の正面中央を一部切り上げて下屋に板葺の庇を付け、二階の明り取りを設けており、付近にはあまり類例のない、特徴的な形態をも合せている。

間取りは、下手に広い「シタンマ(下ん間、土間)」をとり、上手に四つの部屋が田の字型に並んで、いわゆる整形四間型の間取り形式となっていたが、「イタノマ」と「ジロベヤ」境の建具による間仕切は後補のもので、建造当初は一つの広い板敷きの部屋となり、いわゆる広間型と呼ばれる間取り形式であったと考えられる。また、「シタンマ」の前半分および下手部分の上部と、「イタノマ」および、「ネヤ」(寝屋)の上部には、当初から二階部屋が設けられており、とくに「イタノマ」の二階には、前述した特色ある窓が正面にあげられていて「マドニカイ(窓二階)」と呼ばれていた。「ジロベヤ」の部分には二階はなく、簾子天井が張られており、囲炉裏(ユルイ)の煙が屋根裏に抜けるようになっている。したがって、「イタノマ」と「ジロベヤ」は、間仕切はなくてもそれぞれ別個の空間的性格を有していたといえる。「ウクンザシキ」の上部にも二階はなく、「ネヤ」上部の「ネヤニカイ(寝屋二階)」は孤立した部屋となっており、裏の「カクシカイダン(隠し階段)」からしか上がることはできない。

間取りが広間型から四間型へ移行するのは、ほぼ日本全国において認められる発展形態であるが、その時期は地域によってかなり異なっている。戸入では近代になってから四間型に改造された例が多く、この移行は比較的新しい現象と考えられる。ただし、この宮川家の場合は、上述したように、当初からいわば四間型的な空間的性格をもっており、両者の中間的な形態とも考えられよう。

* 名古屋大学工学部建築学教室助教授 工学博士

入口は、ガラス戸の引違いに改造されていたが、痕跡や聞取りから片引きの大戸であったことが明確であり、一間半のうち上手側を開口部として、板戸と障子戸が復原された。ただし、大戸を入ったすぐ上手の「イタノマ」の上がり框に、段梯子の彫桁に見合う欠き込みがあり、その痕跡を生かすと、入り口で目の前を二階へ上がる梯子が斜めに横切ることになり、むしろ開口部は下手側であったとすべきであるが、大戸の敷居・鴨居の痕跡とは合致せず、一方、上がり框の欠き込みには材を押し込んだ跡は認められず、また二階の床根太等にも彫桁をとめた痕跡は見られない。したがって、建造段階ないしは建造中における変更と判断せざるをえない。

入口の下手には、1間四方の板敷きの部屋があり、「カミヤ（上屋、紙屋）」と呼ばれ、ここで紙を漉いていたという。正面には低い窓が設けられており、座って紙を漉くのには都合のよい明り取りになっている。窓には格子が入っている。

「シタンマ」すなわち土間の下手には、大きな桶が埋けられ小便所となっている。また風呂場も設けられていたが、建造当初にはなかったものである。また奥の角には井戸があり、その一面を「ミズヤ（水屋）」と呼び、それと並んで、味噌や醤油、鍋釜等をおく板張りの台が設けられていたが、当初は造付けではなく、土間の上に板を敷く程度のものであったらしい。土間の前半分と下手部分の上部は板床が張られ、主として物置となっており、場所に応じて「シタンマニカイ（下間二階）」「カミヤニカイ（上屋二階）」「シモデニカイ（下出二階）」などと呼ばれ、土間さら梯子で上がっていたが、「シモデニカイ」は壁で囲われ「マドニカイ」から入るようになっている。土間には、紙打ち石、藁打ち石、唐臼などが買かれていたという。

土間から「イタノマ」への上がり口には、造り付けの上がり段が設けられていたが、聞取りにより、丸太の上に板を置いた簡単なものに復原した。間仕切は、上部に太い指鴨居を入れ、敷居を框の上に置いて新しいガラス戸が建てられていたが、「ジロベヤ」と土間境の建具に倣って、腰高障子に復原された。この敷居は、両者とも、一度裏返して再用されている。

「イタノマ」には最近になって畳が敷かれたが、当初は奥の「ジロベヤ」とひと続きの板張りの床であった。天井は二階の床の根太天井となっており、その床の一部を開口部として二階に上がる段梯子が付いている。前述したように、初めは入口部分に設けられる計画であったとも思われるが、建造後に変更した痕跡はなく、当初からここに付いたものと考えられる。「ジロベヤ」との間には、一段高く指物が入っており、その下に鴨居を吊って障子戸が建てられていたが、この鴨居は後に入れられたものであり、当初は間仕切はなかったと判断される。ただし、かなり早い時期に改造されたものであろう。正面にはガラス戸が入っていたが、障子戸に復原した。その外に一筋の雨戸が入る。前面の下屋部分は濡縁となっていたが、当初は「ウクンザシキ（奥座敷）」前の下屋とともに土間であったと考えられる。この下屋部分は「ワルキタン（割木棚）」と呼ばれ、薪を積む場所となっていた。奥座敷との境には帯戸が入る。また床下には堅穴が掘られており、芋などの貯蔵に用いられたという。

「ジロベヤ」には約半間四方の囲炉裏があり、部屋の名称もその存在からきたものと考えられる。囲炉裏端の名称は、下手を「シモジロ」、表側を「マドジロ」、上手を「ヨコタジロ」、裏側を「ナベヤジロ」と称していた。上部は吹抜けとなっており、梁上に竹の簾子天井を張っている。裏側半間の下屋部分は、床を一段高くして、下手半分には戸棚を置き、上手半分は「ネヤニカイ（寝屋二階）」への階段の上がり口となって、壁に窓が開けられ、格子が嵌められている。土間境には腰高障子が入っているが、敷居はここでも裏返して再用されている。「ネヤ」境には指鴨居が入り、帯戸が建てられている。

「ウクンザシキ（奥座敷）」は畳敷きで、当初からの畳敷きはこの部屋だけである。天井も竿縁天井が張られ、二階は設けられていない。上手半間は框を入れて一段高くし、奥側一間に仏壇を置き、

表側1間は床の間とされていた。長押も廻らされているが、「ネヤ」境は、指鴨居をはつって長押を造っており、小壁は張付壁となっている。正面のガラス戸は当初障子戸で、「イタノマ」と同様、外に一筋の雨戸が入る。「ネマ」境には襖が建てられているが、当初は板戸であったかも知れない。

「ネヤ(寢屋)」にも畳が敷かれていたが、最近入れられたもので、当初は板敷きであった。ただし、敷居等の付け方を見ると、建造当初から畳を入れられるように造られたものと考えられる。部屋の上手と裏前の半間の下屋部分は、曲折りに床を高くして物置きとされており、その一部には隣の「ジロベヤ」から二階へ上がる階段が収まっている。この階段は隠し階段と呼ばれていた。建具はなかったが、それぞれ2本溝の指鴨居と框が入っており、なんらかの戸が建てられることになっていたと考えられるのだが、これらの溝には使用された跡が認められず、計画のみに終わったものとも思われる。建具がないと、隠し階段の側面が露出してしまうので、その部分は板で覆われていた。今回の復原に当っては、2本溝に合せて引違いの板戸を新補した。上手側の框は、端部で切断されたような痕跡があるが、建造以後なんらかの改造は考えられず、あるいは接木したものとも思われるが、明確ではない。また上手の壁にガラス戸を箆殺した窓が二箇所開けられていたが、これは後の改造によるものである。天井は二階床の根太天井となる。

「イタノマ」の上の「マドニカイ」は板敷きで、壁は堅板張り、天井は梁上に板張りとする。正面の開口部にはガラス戸が入っていたが、当初は障子であったと考えられる。外には一筋の雨戸が入る。この部屋は養蚕に使われたものとみられる。壁板に大正10年の墨書があった。

「ネヤ」上部の「ネヤニカイ(寢屋二階)」も板敷きで、壁は堅板張り、天井は梁上に板張りとする。妻側に採光の窓がとられ、格子が入り、引違いのガラス戸が建てられていたが、今回の修理で板戸に復した。あるいは、当初は障子戸であったかもしれない。この部屋は養蚕にも用いられたかもしれないが、一階を養蚕等に使った場合の家族の寝室として用いることが多かったようである。

構造は他の家屋と比べて、より進んだ形式をとっている。全体に建ちが高く、上屋柱はすべて小屋梁まで達する長い通柱となっており、各部屋の隅毎に建てられ、その間に成の高い指物ないし指鴨居を入れて固めている。とくに梁間方向の指鴨居は長柄によって上屋柱を貫き、下屋柱に鼻栓で留めている。下屋柱は、正面を除いて半間毎に建ち、貫を通して楔で固め、壁には貫を外に見せて堅板が張られている。柱いづれも礎石の上に建てられているが、移築にあたっては、礎石の下部をコンクリートで補強した。

扱首は梁間4間に組まれているが、比較的細い。茅葺の屋根は下屋まで葺下されており、正面の窓の部分を除くと、庇は設けられていない。

この建物の建造年代についての明らかな資料は見出せなかったが、解体中、「ジロベヤ」背後の窓の雨戸の戸袋板の裏に次のような墨書が発見された(ただし実物は縦書き)。

明治廿三年十二月新造 宮川與四郎持主
二師正観大藤原義睦 方懸郡中村 松野源太郎

しかし、この裏窓の戸袋は後に付けられたものともみられ、その年代の建物の建造を示すものとは必ずしもいえない。宮川與四郎氏は現当主の祖父に当り、明治40年に亡くなられているが、一方、家の伝承によると、この家を建てたのは與四郎氏の父長蔵氏で、大工は同じ戸入の橋本イクエ氏であり、その橋本氏の家も屋根の一部を切り上げて二階部屋を設けていたといわれる。橋本家は昭和7年に焼失したが、「揖斐郡誌」(大正13年)に載せられた「徳山村家屋」の写真がその建物とされ、それによると、宮川家よりさらに広く屋根が切り上げられている。また、すぐ隣りに建っていた増山家にもこの形式の窓がかつては存在し、さらにその家は宮川家に倣って造られたものとも伝えられている。しかし増山家は、岐阜市北野ファミリーパークに移築・保存されるにあたっての調査によって、その窓は後に改造してあけられたものであることが判り、現在は建造当初の姿に復原され、

この窓はなくなり、屋根が葺下ろされている。一方、宮川家では柱の状況からみて、この窓は当初から存在していたと考えられる。増山家の建造年代も明確ではないが、宮川家を模倣したという伝承は、窓の改造のみに関するものとみれば納得し易い。ただし増山家も建物の高さはかなり高く、なお疑問は残る。

また宮川家では、近江の大工「ゲンタ」が、「ジロベヤ」の大棚と「ザシキ」の天井を造ったという伝承もあり、墨書の「源太郎」との関連が考えられるが、方懸郡中村は美濃であり、伝承と必ずしも一致せず、今のところ不明確なままである。

二階正面の窓は養蚕のためのものと考えられるが、徳山村でも珍しく、もともと中部地方には見られない形式である。同様の窓形式をもつ民家としては、群馬県の赤城山麓に分布している、いわゆる「赤城型」の民家がよく知られているが、何らかの関係があるのかどうか今のところ判らない。いずれにせよ、徳山村においては、新しい形態を先進的に導入した民家といえよう。

このように宮川家は、徳山村戸入における近世以来の伝統的民家の系譜の中で、構造的にも、また空間的にも、最も発展した形態を示すものであり、近世末期から近代初頭にかけての建築と生活を伝える貴重な遺構である。



写真1 徳山村にあったころの宮川家

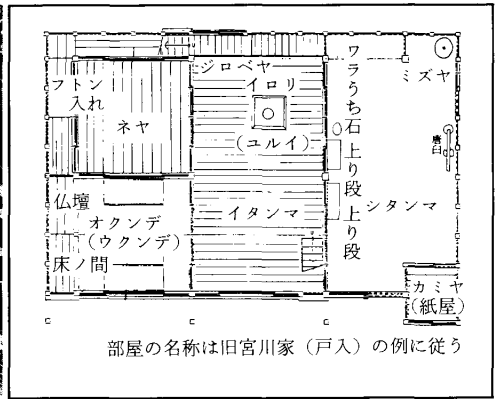


図1 1階間取り図(復原したもの)



写真2 移築復原された宮川家

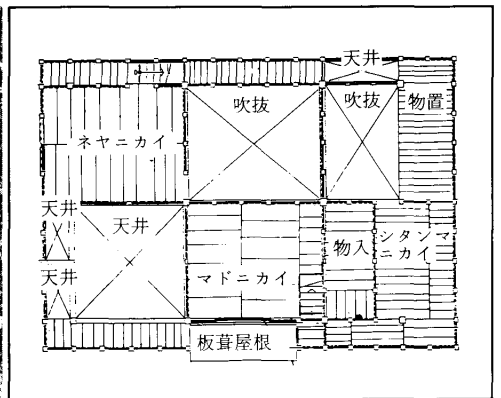


図2 2階間取り図(図は岐阜県博物館作成)